視線の変化と価値の逆転

Henry James : 'The Beldonald Holbein'

堤　　千佳子

I

この作品はJamesの身近な友人からのヒントが素となり、その話を聞いてから2年後にHarper's New Monthly Magazineにおいて発表されたものである。

直接のモデルとなったのは、夫婦でJamesの友人であった作家、紀行家のMaud Howe Elliotの母親で、編集者、詩人、女性運動家、伝記作家でもあったJulia Ward Howeであった。Jamesは彼女が1899年、70歳代も後半になって、ローマで "(a) picturesque striking, lovely old (wrinkled and marked) [Hans] Holbein [the younger]"[1]として非常な人気を博し、画家たちが彼女を描こうと夢中になったとElliotから聞いたことを記している。

James は Holbein the younger に関しては高い評価をしていて、"superb genius, "[2] "supreme genius"[3]と呼称している。また、この芸術家に関しては、Jamesの別の友人、Isabella Stewart Gardenerが同じく1899年に購入したHolbein the youngerのLady Buttsの肖像画がJamesにインスピレーションを与えたとされている。

GardenerはJamesより3歳年上で、裕福で知的な芸術のパトロンであり、美術品の収集家であった。彼女はJamesと育った環境もよく似ており、生まれた場所も、家庭の豊かな財政状態も、パリの学校に通い、若いうちにイタリアへ旅行したことなど、類似点も多かった。Jamesは彼女の広範囲な美術品の収集を可能とする裕福さや、ヨーロッパのみならず、中東や日本に至るまで幅広く旅をする行動性に称賛と同時に羨望の念を抱いてい

た。彼女が彼の作品に与えた影響も大きく、*The Portrait of a Lady*の主人公 Isabel Archerはその名も類似しており、彼女の生き生きとした魅力もヒロインの中に息づいている。美術品収集にかける彼女の情熱は*The Spoils of Poynton*のAdela Gerethや*The Golden Bowl*のAdam Ververの熱意に反映されている。また、*The Wings of the Dove*の主人公Milly Thealeが身につけ、それがKate Croyの欲望をかき立て、陰謀へとつながるきっかけとなった豪華な真珠のネックレスは、彼女が身につけていたものを念頭に置いて描いている。

II

この作品では語り手が肖像画家であり、知人のMunden夫人によって義理の妹のLady Beldonaldを、紹介されることによって始まる。Lady Beldonald がアメリカ人であることが義姉の口から読者に知らされるが、Munden 夫人自身に関しては国籍などについては触れられていない。しかし、Lady Beldonaldがアメリカ人であることが問題の一つであり、アメリカ人があまりにも多いということを述べていること、設定の類似している他の作品からの類推によって、恐らく彼女はアメリカ人ではないと推測される。

アメリカ人であることはこの場合何をもたらすのだろうか。語り手は『うまくやっていく一つの方法』(“the way of waysto get on”)[4]と述べているが、Munden夫人はアメリカ人であることは『問題から全く外に身を置く方法の一つ』(“one of the ways of being awfully out of it”)(376)と反駁している。この当時、Jamesの他の作品においても見られるように、アメリカ人はヨーロッパを多いに旅行し、本当に受け入れられているかどうかは別として、現地の社交界にも進出していた。語り手はアメリカ人であることが都合のいいパスポートになっているのだということを示唆していると思われる。しかし、Munden夫人にしてみれば、アメリカ人であることが何らかの欠点だと認識している。それは彼女の次の発言で明

らかにされる。　夫が病死した後、Lady Beldonaldはロンドンで過ごすようになったが、Munden夫人は彼女のあり方が気に入らない。『彼女には人生が欠けている。』(“She hasn't what I call a life.”) (376) Lady Beldonaldに欠けている『人生』とは何を指すのだろうか。そしてMunden夫人にはLady Beldonaldが『人生』を求めているのかどうかも分からないのである。そこで彼女はある方法を用いて義妹に『人生』をあてがおうとするのである。

> “Perhaps she's too old. ...(too old) For anything. Of course she's no longer even a little young; only preserved — oh but preserved, like bottled fruit, in syrup! I want to help her if only because she gets on my nerves, and I really think the way of it would be just the right thing of yours at the Academy and on the line.” (377)

Lady Beldonaldの存在が『神経に触ってしまう』ため、Munden夫人は義妹の肖像画を描いてもらい、それを美術館で眼の高さで展示してもらおうとするが、これは恐らく義妹を売り出し、誰かの許に片付けてしまおうという意図であろう。また、その過程を観察することを楽しもうとする考えが見え隠れする。このような態度はJamesの他の作品、*The Portrait of a Lady*の主人公Isabel Archerの夫の妹のGemini伯爵夫人、“Madame de Mauves”の主人公Euphemiaの夫の妹であるClairin夫人が、夫に裏切られているアメリカ人の義姉に彼女らに思いを寄せる男性との親密な交際を勧めているのに似た要素がある。このような振る舞いは自分たちの退廃した社会慣習に、ただ一人染まらないアメリカ人の義姉を巻き込もうとする陰謀である。しかし、そのために芸術を利用しようとするMunden夫人にも、Lady Beldonaldにも芸術に関する鑑識眼は備わっていない。

Lady Beldonaldの特徴の一つとして『保存状態にある』(preserved)ことが挙げられる。Munden夫人は『瓶に入ったシロップ漬けの果物のよう

に保存されている』と述べたが、語り手の受けた印象は少し異なっている。

> She's indeed in one particular, I think, sole of her kind — a person whom vanity has had the odd effect of keeping positively safe and sound. ...but it has landed her ladyship nowhere whatever — it has kept her from the first moment of full consciousness, one feels, exactly in the same place. It has protected her from every danger, has made her absolutely proper and prim. If she's "preserved," as Mrs. Munden originally described her to me, it's her vanity that has beautifully done it — putting her years ago in a plate-glass case and closing up the receptcle against every breath of air. How shouldn't she be preserved when you might smash your knuckles on this transparency before you could crack it? And she is — oh amazingly! Preservation is scarce the word for the rare condition of her surface. She looks naturally new, as if she took out every night her large lovely vanished eyes and put them in water.(377—8)

語り手はLady Beldonaldを巧みに『保存』して来たのは彼女の『虚栄心』であるとする。そしてその『虚栄心』が彼女をあたかも『ガラスのケース』の中で彼女を陳列しているかのように『保存して』いると考える。『虚栄心』が彼女を『安全』に『保存』してのかも知れないが、語り手が述べている通り、『虚栄心』とは往々にして人の道を誤らせる結果を導く。この作品においても、実際に、Lady Beldonaldは後に彼女の従姉であるLouisa Brashの運命を変え、そしてBrash夫人を『知ったこと』による悲劇へと導き、彼女を死へと追いやってしまうことになる。この場合、引き立て役を置こうとしたLady Beldonaldの『虚栄心』は一時的に彼女を望ましくない立場へと追い込むが、結果的に彼女は自分の都合のいいよう

に、そして彼女を『安全な』立場へと連れ戻すのである。まさしく彼女の『虚栄心』はベットリとした彼女の自己愛という『シロップ』の中に彼女自身とともに『保存』されているのである。そして彼女は『ガラスのケース』の中で『あらゆる風のそよぎ』(every breath of air) (377)にもさらされないのである。ただし、何年も同じ状態で『保存』されているため、外見は若々しくとも、成長を遂げることはなく、内面は停滞し、進歩も見られない。このような状態は前述のMunden夫人の言葉にも現れる。語り手はそのような背景とともにLady Beldonaldに画家として触手を動かされるのである。

> The thing was to paint her, I perceived, in the glass case — a most tempting attaching feat; render to the full the shining interposing plate and the general show window effect. (378)

生身のLady Beldonaldではなく、『ガラスのケース』という『ショウウィンドウ』としての効果をもたらすものを含めて彼女を描くということは、彼女の『保存状態』に関心があるということである。言い換えれば、画家の概念の中に彼女の姿を作り上げ、その彼女を描くということである。それは『ガラスのケース』の中の彼女を商品と見なしているということである。

一方、彼女の『虚栄心』は主に自分がいかに見えるかということを中心としている。(I saw how her life must have its centre in her own idea of her appearance. Nothing else about her mattered.) (377)

そのため彼女は常に自分の『引き立て役』(foils)を用意し、その維持に気を配っている。語り手のモデルを引き受けるのを延期したいと申し出たのはそのMiss Dáddが重態になったためだったが、彼女の真意は友人の容体の心配というよりも、むしろ友人がこれからも彼女の『引き立て役』を務めることができるのかどうか、もし駄目なら新たな『引き立て役』を用意しなければならないこと、そういった心配が彼女の容貌に影を落とす

ことを懸念しているのである。彼女はMiss Daddを自分の身近な友人としてではなく、自分を引き立てる(stand out)(379)ための道具としてしか見なしていない。そのことは、真珠の飾りを引き立てるための黒いヴェルヴェットの布の引用からも明らかである。自分を真珠の首飾り、つまり人目を引き、美術品としても、工芸品としても(言い換えれば市場価値という点においても)秀れたものであるとし、直接他人の手に取られる時以外は、いつも黒いヴェルヴェットの布、つまり他に価値のない引き立て役に引き立てられているのだと、自らの優位性を明らかにしている。

Lady Beldonaldが自分の付き添い人との間に持とうとする関係はいかなるものであろうか。Munden夫人の観察によると次のようなものである。彼女が求めるのは、『一貫して、陽気で、忠実で不器量であること』(consistently, cheerfully, loyally plain)(380)という条件である。

しかしこの関係はLady Beldonaldによる一方的な搾取の関係というわけではない。彼女は自分の『引き立て役』として付添人たちを利用しようとしているが、付添人たちの方でもその関係を利用しようとしているのである。 彼女たちはお返しに『友情』(amiablility)や、彼女が提供する『家』(home)(380)のために彼女を愛するのである。この『とても幸せな関係』(a most happy relation)(380)は彼女らの側からすると『仕事、ビジネス』(a career)(380)なのである。お互いが、友情を演じ合って、ある種の取引を行っているのである。この『幸せ』とはお互いが相手の求める条件を満たし、お互いが自己満足している状態を指しているのである。

Lady Beldonaldのほうでは、『引き立て役』の他に家政婦としての役割も求めている。

> Such a successor, I gathered from Mrs. Munden, widowed childless and lonely, as well as inapt for the minor offices, she had absolutely to have; a more or less humble alter ego to deal with the servants, keep the accounts, make the tea and watch the window-blinds.(382)

彼女の夫の経歴等については全く触れられていないが、療養のため、あちこちを点々とし、特に職業に付いていたとは考えられない。しかしながら、彼女にかなりの財力があることは間違いない。Lady BeldonaldがBrash夫人に対して提供したのは、付き添い人、家政婦としての地位だけではなく、経済的安定をそれに付随させている。この点においても彼女たちの付き合いが単なる友情でないのは明らかである。そのため、Brash夫人は喜んでこの取引に応じたのである。

> The position offered her by Lady Beldonald was moreover exactly what she needed; widowed also, after many troubles and reverses, with her fortune of the smallest and her various children either buried or placed about, she had never had time or means to visit England, and would really be grateful in her declining years for the new experience and the pleasant light work involved in her cousin's hospitality. They had been much together early in life and Lady Beldonald was immensely fond of her — would in fact have tried to get hold of her before had n't Mrs. Brash been always in bondage to family duties, to the variety of her tributions. (382-3)

Brash夫人の境遇は "Four Meetings" の主人公Caroline Spencerのものと類似している。両者ともヨーロッパに憧れを抱きながらもアメリカでつつましく生活を送り、いとこの招きに応じてやっと憧れの地、ヨーロッパに向かうものの彼女たちを利用しようとするいとこの術中にはまり、ヨーロッパを真に体験することもできないまま、アメリカに戻り、残りの人生を送るが、結局満たされない情熱や虚しさが命取りとなってしまうという共通項が挙げられる。Brash夫人は晩年になってその美しさが認められ、それが『虚栄心』の高い従妹の嫉妬を招き、アメリカへ送り返されてしまう点に人生の皮肉が見られる。しかし、この皮肉も、語り手である画家と、

彼の友人のフランス人画家Paul Outreauという美術に関する鑑識眼を持った二人によって生み出されたものである。この二人がいなければ、Brash夫人はLady Beldonaldの『引き立て役』として、それまでと同じく、内包する美しさに気づかれることもないまま、醜い存在としてイギリスで暮らせていたことだろう。しかし人間の類型“type”に多いに興味を持ったOutreauに眼を留められてしまったのである。彼が最初に彼女がホルバインの絵そのものであると気づいたのだった。“She's the greatest of all the great Holbeins.”(384)

語り手自身もBrash夫人を高く評価することとなる。視点の変化に伴い、価値の逆転が起こってしまうのである。

> She was a Holbein − of the first water; yet she was also Mrs. Brash, the imposed “foil,” the indispensable “accent,” the successor to the dreary Miss Dadd! (385)

> It was before me intensity, in the light of Mrs. Brash's distant perfection of a little white old face, in which every wrinkle was the touch of a master; (386)

> “Why the wonderful sharp old face − so extraordinarily. consummately drawn − in the frame of black velvet.” (386)

しかし、彼がこのことを口にしたことが『ひどく奇妙な事件の始まり』(“the beginning of a most odd matter”)(386)となってしまたのである。彼は既に自分以外のことに注目していると気づいていたLady Beldonaldのプライドを傷つけてしまったのである。しかし、『保存』されてきていた彼女の取り澄ましたのとは異なった美しさが発露されたのもこのためであった。

If Lady Beldonald had the theory that her beauty directly showed it when things were n't well with her, this impression, which the fixed sweetness of her serenity had hitherto struck me by no means as justifying, gave me now my first glimpse of its grounds. It was as if I had never before seen her face invaded by anything I should have called an expression. This expression moreover was of the faintest — was like the effect produced on a surface by an agitation both deep within and as yet much confused. (387)

しかし彼女は全く納得できずに、"upset"してしまい、結局本来の目的であった彼女が語り手のモデルになることはご破算になってしまった。またこのことはBrash夫人にとっても驚くべきことであった。

Here was a poor lady who had waited for the approach of old age to find out what she was worth. Here was a benighted being to whom it was to be disclosed in her fifty-seven year ... that she had something that might pass for a face. She looked much more than her age, and was fairly frightened. (393)

Brash夫人は自分でも気づかないうちにそれまでの彼女の評価とは全く反対の名声を得てしまい、本来果たすべきだと思われていた役割と大きく逸脱してしまったのである。

She had been "had over" on an understanding, and she was n't playing fair. She had broken the law of her ugliness and had turned beautiful on the hands of her employer. (393)

彼女はLady Beldonaldが彼女に"impose"していた役割を演じるうえ

でのルール、『醜くあるというルール』を破ってしまい、彼女の『雇い主』であるLady Beldonaldを裏切る結果となってしまったのである。彼女は『いかにして醜くありうるか』("how to be ugly")(394)は心得ていたが、自分が評価されることには全く不慣れであった。

> We can do this: we can give a harmless and sensitive creature hitherto practically disinherited — and give with an unexpectedness that will immensely add to its price — the pure joy of a deep draught of the very pride of life, of an acclaimed personal triumph in our superior sophisticated world. (399)

語り手はBrash夫人に素晴らしい機会を与えようとしているが、あくまでもそれは芸術家である自分の関心の赴くままに行おうとするもので、Brash 夫人の真の人間性を認めたものではなかった。彼女を芸術作品の一つとして見なすという、いわば、彼女を一人の人間としてというよりも『もの』として見なすという不遜な態度である。しかも、そのことに気づきもしないで、善意の行為、或いは、鑑識眼のない人間(Lady Beldonaldを含めて) には分からないかもしれないが、見る眼のある画家である自分には、これまで顧みられることもなかった、埋もれた芸術作品に日の光を当てることができたという自負のようなものまで窺えるのである。これは "in our superior sophisticated world" という彼の言葉にはっきりと表れている。

Brash夫人が成功を収めている間、Lady Beldonaldはどうしていただろうか。

> while she lived at least — and it was with an intensity, for those wondrous weeks, of which she had never dreamed — Lady Beldonald herself faced the music. This is what I mean by the possibilities, by the sharp actualities indeed, that she accepted.

She took our friend out, she showed her at home, never attempted to hide or to betray her, played no trick whatever so long as the ordeal lasted. She drank on her side too, of the cup — the cup that for her own lips could only be bitterness. (402)

Brash夫人はLady Beldonaldのため、語り手の申し出を受けて肖像画を描いてもらうのを断るという犠牲を払ったが、Lady Beldonaldもその試練を受けたのだった。しかし彼女にとってBrash夫人が芸術作品として秀れているのを理解できなかったからこそ彼女の苦痛はある意味において軽減されたのである。彼女は芸術に関する鑑識眼はないかも知れないが、美に関する鑑識眼は芸術家よりも自分の方が秀れていると考えたのである。

She could n't possibly have made it out; her friend was as much as ever "dreadfully plain" to her; she must have wondered to the last what on earth possessed us. Would n't it in fact have been after all just for this failure of vision, this supreme stupidity in short, that kept the catastrophe so long at bay? There was a certain sense of greatness for her in seeing so many of us so absurdly mistaken; (402)

Lady Beldonaldは語り手たちが『愚かな過ちを犯すのを見て優越感に浸って』はいたが、『彼女が反省して美徳を取り繕うとして発した単なる偽善的な態度』("the mere hypocrisy of her refleclive endeavour for virtue")(402)からBrash夫人がHolbeinの肖像画であると認識したことを語り手に告げる。しかしその結果思いがけない作用がもたらされる。

when she uttered the words just quoted, this high serenity, as a sign of the relief of her soreness, if not of the effort of her conscience, did something quite visible to my eyes, and also

quite unprecedented, for the beauty of her face. She got a real lift from it --such a momentary discernible sublimity... (402)

常に『保存』されていたような彼女の美貌に自らのプライドを救うために発した言葉によって画家の意欲を刺激するようなものが加わった。モデルになるには表面的なものだけではなく、内面やそれまでの生き方が必要なのである。これは "The Real Thing" において本物の紳士や淑女であっても絵のモデルとして紳士や淑女にふさわしいわけではないというテーマと重なり合うものである。語り手はLady Beldonaldの表情の変化に強く魅かれ、『今だったらあなたを描くことができると思っていることがお分かりになりますか』("Do you know I believe I could paint you now?") (403)と口走ってしまう。

Lady Beldonaldにとってこの発言が語り手の思惑どおり、受け取られたかどうかは定かではない。彼女にとって、Brash夫人の成功は明らかに、本来の予想とは大きく逸脱していたものであり、彼女にとって屈辱をもたらすもの以外の何物でもない。ただ、Brash夫人の何がそんなにも語り手を含めた芸術家やその周囲の人間たちを魅きつけるのかが分からないまま、彼女は彼女自身の美的判断において、彼等を見下して、傷つけられたプライドを保持しようとしていたのである。ところが、語り手の発言はその彼女のプライドを更に傷つけることとなった。語り手は『保存』されて来た彼女の変化に乏しい表情よりも、微妙な感情に作用された美貌の方を半ばおもしろがって採用しようとしたが、彼女自身は本来彼女の『引き立て役』のはずであったBrash夫人の成功の陰に隠れ、彼女自身がBrash夫人の役に立たされているという逆転した役割を演じさせられている。いつも『最高の状態を見せよう』としてきた彼女にとって今の屈辱的な状態にある自分を描かれるのは不本意であった。Brash夫人と比べて自分を否定的に評価されるのは彼女にとって耐え難いことであった。また、彼女にとってこれまでどおり、 "plain" であるBrash夫人と同等に扱われたと彼女が考えたことは想像に難くない。その結果、今まで先延ばしにしていたBrash夫

人への制裁を行うこととなってしまったのである。『彼女は彼女を単に送り返してしまったのです。』("She has simply shipped her straight back.")(403) Lady BeldonaldはBrash夫人をアメリカへ送り返してしまったのだった。"simply," "straight"という言葉にBrash夫人の意向も聞かず、有無を言わせず、送り返してしまったLady Beldonaldの強い意志を見ることができる。語り手は自分の不注意な発言がやがては来ることになってはいたものの、先送りされていたBrash夫人の喪失を招いたことを知るのであった。そして失くして見て改めてその価値を認識することになったのである。

> ... for the masterpiece we had for three or four months been living with had made us feel its presence as a luminous lesson and a daily need. We recognized more than ever that it had been, for high finish, the gem of our collection — we found what a blank it left on the wall. (403)

しかしLady Beldonald自身もこのとき語り手の申し出を受けていたら、描いてもらえたかも知れない、彼女自身も知らない彼女の美貌に影響を与える内面の微妙な動きを映し出した肖像画を手に入れる機会を逸してしまったのである。

> ... though now again so satisfied herself of her high state, she could give me nothing comparable to what I should have got had she taken me up at the moment of my meeting her on her distinguished concession. (404)

Lady Beldonladは今度は間違えない選択をし、決して彼女を冒瀆するような後継者は選ばなかったのである。しかも、それまでの彼女の付き添いの条件であった "ugly" な女性ではなかった。美しくはあっても人の眼

をひかない、『ほとんど問題にならない』女性を選んだのであった。そうすることによってLady Beldonaldは従来の彼女にはなかった『知的な』要素までも持つことになったのである。

> The formula was easy to give, for the amusement was that her prettiness — yes, literally, prodigiously, her pretiness — was distinct. Lady Beldonald had been magnificent — had been almost intelligent. Miss What's-her-name continues pretty, continues even young, and does n't matter a straw! She matters so ideally little that Lady Beldonald is practically safer, I judge, than she has ever been. (404)

アメリカへ送り返されたBrash夫人のその後は文通を続けていたMunden夫人によって間接的に知らされることとなる。

> They (the letters) so told to our imaginaiton her terrible little story that we were quite prepared — or thought we were — for her going out like a snuffed candle. She resisted, on her return to her original conditions, less than a year; the tast of the tree, as I had called it, had been fatal to her; what she had contentedly enough lived without before for half a century she could n't now live without for a day. (405)

Brash夫人の最期は "Four Meetings" のCaroline Spencerのそれと類似している。しかしBrash夫人には『木の実』を自ら味わったことがより致命的となってしまったのである。知ることがなければ、平穏に過ごせたものが、自分でも知らなかった自分の価値を発掘されてしまったことで不幸に陥ってしまったのである。彼女にとっては『知る』ということは "Fortunate Fall" にはならなかったのである。

Brash夫人の最期に際して、語り手はMunden夫人とともに、『ささやかな葬式』(405)を行ったと述べているが、彼の態度はJamesの作品によく現れる、傍観者のそれであり、彼女を真に悼んでいるわけでは決してない。『全てを話し合い、明らかにすることによって』(405)、『葬儀』を行ったと書かれているが、彼はもともと自分が引き起こした『全く奇妙な事件』(a most odd matter)(386)であるにもかかわらず、少しも責任を感じていない。ただ彼は、Brash夫人が『偉大な美術館のためのHolbeinの肖像画』(a Holbein for a great museum)(395)であるのを発見し、それを公表したに過ぎなかった。

Ⅲ

語り手とMunden夫人はある意味において共犯者であるとも言うことができる。Munden夫人は元々は彼女の義妹のあり方が『神経に触る』ため、語り手に彼女の絵を描いてもらい、それを展示することで、何らかのドラマを発生させ、彼女には『人生』を与えたいと思い、語り手に彼女との仲介を示唆したのだった。そのような態度も他人の運命を操り、自分は安全な場所にいてその展開を楽しむといった、操作者のものである。そして、語り手がBrash夫人をHolbeinの絵であると発見したところ、彼女自身はそれほどの鑑識眼を持っているわけではないが、『もの珍しさ、そして身近で人間的な観点から、その状況の素晴らしさや、興味に関して、私（語り手）にすぐに同意した』(Mrs.Munden was promptly at one with me as to the rarity and, to a near and human view, the beauty and interest of the position)(392)のである。最も彼女が世間にBrash夫人がHolbeinの絵画そのものであると広めた点では彼女の役割は無視できない。二人はLady Beldonaldではなく、Brash夫人の運命を興味を持って見守り、『その悲愴な破局』(a touching catastrophe)(390)に感動を持って立ち会ったである。

一方、Brash夫人自身については、Lady Beldonaldの引き立て役とし

ての道具、そのほかの者、世間（ここでは美術界）にとっては鑑賞、或いは観察の対象として以外、描かれることは少ないので、彼女自身の人間性の描かれ方が希薄であるのは当然と言えよう。ただ、肖像画のモデルを断ったことに見られる寛大でありたいとする態度、アメリカへ送り返された後の態度、他者を責めない点に彼女の意志の現れを見ることができる。このとき、彼女は『壁に顔を絶望的に向けた』(turning, in its dishonour, its face to the wall)(405)とあるが、この態度は*The Wings of the Dove*の主人公、Milly Thealeが友人たちの裏切りを知った後に取る態度と酷似している。しかし、Millyがそれを克服し、最終的に死を乗り越えて勝利を治めるのに対し、Brash夫人は『所属する美術館から追放され、それを陳列する新たな運動が起こることに励まされることもなく、沈黙の革命という奇跡を成し遂げることができただけだった。』(banished from its museum and refreshed by the rise of no new movement to hang it, was capable of the miracle of a silent revolution)(405) 『ホルバインの絵のための市場』(a market for Holbeins)(405)ではないアメリカの小さな町では、そこに済む鑑識眼のない人たちにとっては芸術は芸術足り得ないのである。

この作品においては、後の長編小説の題材となるものや、人物造形についての萌芽を見ることができる。また、Jamesが著した作品の分類の中の『芸術家』ものと重なり合う要素も持っている。小品ではあるが、後の作品の橋渡しになる要素を持ち合わせたものと言うことができる。

しかし、語り手である肖像画家は『芸術至上主義』的な主観を持って物事を眺めており、彼はJamesの他の作品でも見られるような“unreliable narrator”であって、必ずしもこの『ささやかで、ひた隠しにされた、極めて個人的なドラマ』(a drama of small smothered intensely private things)(390)を完全に見通していたと考えるのには無理が生じる。Brash夫人がアメリカへ戻ったことにしてもLady Beldonaldの嫉妬によるものだという推測は成立するにせよ、その後のアメリカでの生活についてはMunden夫人に宛てた手紙から生じた彼の想像からしか読者には知らされ

ない。手紙に何が書かれていたのかは明かされないままである。この明かされない手紙を用いるという手法は "The Turn of the Screw" や *The Wings of the Dove* でも用いられている。語り手を通してしか読者に知らされないというのは、Jamesの生涯のテーマであった『視点』の問題と絡み合って来るのである。彼女の悲劇的な最期は事実ではあったかも知れないが、芸術家である彼にとって満足の行くような解釈が加味されていたと言えるだろう。また、悲劇的な最期を迎えたとは言え、『名声を欲しいままにした』(it had had ... its seasons of fame) (405)というところにも語り手の不遜な意識が表出している。Munden夫人にしても、前述の通り、彼女が自立した意志や想像力を持っていたかはやぶさかではない。彼女は語り手によって自分の意見を左右されながら、あくまでも自分の考えであるかのように装っているからである。

この作品を単に、晩年になって、初めてその内包する美しさを評価されたアメリカ人女性が従妹の嫉妬によってアメリカへ送り返され、満たされない最期を迎えたという読み方をしては少し単純に過ぎるだろう。タイトルは『ベルドナルド夫人が迎えたホルバインの肖像画にそっくりな女性』ではあるが、実際にはBrash夫人をHolbeinの肖像画にそっくりだと（友人とともに）評価し、彼女の運命を狂わせ、この作品の筋となるような『ドラマ』を作り出したのは、語り手である肖像画家なのである。つまり、この『ドラマ』自体が彼の作品であると言えるのである。この点において、同じく、ニューヨーク版の18巻に収められた "The Real Thing"、12巻の "The Liar" との類似点を比べてみるのも興味深いものがある。

《註》

1）Leon Edel, Lyall H. Powers (ed); The Complete Notebooks of Henry James (New York Oxford: Oxfore University Press, 1987) p.183　[ ] は著者

2）Robert Gale: A Henry James Encyclopedia (New York: Greenwood Press,1989) p.310

3) ibid., p.310

4) Henry James,'The Beldonald Holbein,' The Novels and Tales of Henry James, vol.18 (New York: Charles Scribners's Sons, 1909) p.375

以下この作品からの引用は全てこの版によるものとし、ページ数のみを本文中に記することにする。